

溜りたる粉を庖丁にて起しとり、灰を土邊に厚さ貳寸程にひろげ、その上に木綿の二布半ぐらゐなる風呂敷様のものを敷、その上に置ば、半時ほどにして水氣はことごとく灰に吸とり、粉乾くなり、是を糍ふたやうのものに入、日にほし乾かし、紙の袋に入、俵として問屋に出し、商ふ也。偕右叩きひしぎて箱に入、もみたる粕の筋は、又水をかけよくあらひ、日にほし置、雨の日など取出し、水にひたし置、和らかに成たる時、水氣の乾きしを繩になひ束とし賣べし、此繩を則ち世間にてわらび繩と呼びて、垣などを結に用ふるに、雨に濡ても腐ることなし、又風流の垣を結には、綠礬を水にて煮、その中に此繩を入れて引上れば、眞黒に染る也。

偕蕨粉は、反もの、糊と成り、傘をはる糊とし、油紙桐油等の糊、又は求肥わらび餅等になるなり、飢饉の時には、いろくもの物をませ餅となし糧とするに、葛と同様の功あり、多く生ずる所の山里にては、常に掘り糧ともし粉ともして利を得べし。

〔宜禁本草五乾〕蕨菜 甘寒滑、壅經絡、筋骨間毒氣、令人脚弱不能行、消陽事、令眼暗、鼻塞、髮落、冷氣人食之、多腹脹、令人睡、小兒食之、脚弱不行、山人作茹食之、不可生食、日用本草云、蕨根搗洗、澄清成粉、可以充飢性冷、不可久食。

〔毛吹草三〕信濃 干蕨 出羽 干蕨 但馬 干蕨 同繩 紀伊 干蕨

〔奥羽觀蹟聞老志三〕唐貢土產 薇蕨 所生于玉造郡大口村田切邑、尤佳、其長三尺、其莖如矢。

蕨粉 所出于伊澤郡鬼首村、尤好。

〔藝備國郡志上〕安藝土產 蕨索 山縣郡山中農民、到秋掘蕨根、以槌擣之、取其心、水飛以爲蕨粉、以其皮絢索、名曰蕨索、其形堅剛而堪水濕、其色淡黑而不鄙野、用之或縛墻或纏樽、又合作帆綱、又編代簾箔、其所爲用幾許不及枚舉矣。

蕨粉 出山縣郡、蕨根洗淨、以槌碎之、水浸一夜、漉其渣脚、以其汁器盛、水飛、則其白汁凝滯如葛粉、陰